広報もがみは、町の今を記録し、未来へつなぐタイムカプセル

あの日のもがみへ

ー広報でたどる、まちの歩みー

シリーズ 4

大凶作。米が実らなかった、あの時



昭和５５年、最上町を襲った大冷害

昭和５５年、最上町は深刻な冷害に見舞われた。１０月９日発行の『広報もがみ』第３５２号は、表紙から「冷害対策臨時特集」。そこには「作況指数２１」という大きな文字が躍っている。作況指数とは、米の収穫量が平年と比べてどの程度だったかを示す数字だ。平年を１００としたときの２１。数字だけでは想像しにくいかもしれないが、当時の稲作がいかに厳しい状況に置かれていたかを物語っている。

当時、町内で水稲が作付けされていた面積は約１，８００ha。そのうち、収穫皆無となった水田は８００ha に及んだ。町内の水田の約４割強で、米がほとんど収穫できなかったことになる。春から手を掛け、育ててきた稲が実らない。農家にとって、収入だけでなく、これからの暮らしにも関わる深刻な事態だった。

町民一体となって、冷害の克服を



当時の広報紙には、冷害に苦しむ農家の姿と、危機を乗り越えようとする町の取り組みが記録されている。

町は冷害対策本部を中心に対応を進め、臨時議会では救農対策を柱とした補正予算が可決された。農薬や種子の確保、農家への支援、農業土木工事など、被害を受けた農家の暮らしと地域の農業を守るため、さまざまな対策が講じられた。紙面には、町長や農業関係者の言葉も残されている。町長は「町民一体となって冷害の克服を」と呼び掛け、農業関係者も、厳しい状況の中で何ができるのか、これからの農業をどう守っていくのかを語っている。

冷害は、農家だけの問題ではなかった。地域の経済や暮らしにも影響する、町全体の危機だったのだ。当時の広報紙からは、町と農家、地域が一体となって困難に立ち向かおうとした姿が伝わってくる。

技術は進歩しても、自然は思いどおりにならない

あれから４５年余り。米づくりは大きく変わった。品種改良が進み、栽培技術や気象情報も発達した。農家は自然の変化を予測し、被害を減らすための工夫を重ねている。しかし、自然の影響を完全になくすことはできない。

近年、米づくりで問題となっているのが夏の高温だ。稲が実る時期に気温が高くなると、米粒が白く濁る「白未熟粒」などが発生し、品質の低下につながる。かつては夏の低温や日照不足が米づくりを脅かし、今は高温への対応が求められている。冷害と高温障害。現れ方は違っても、気候が稲の生育や収穫を大きく左右することに変わりはない。



さらに、農業の担い手不足も課題となっている。気候の変化に対応する技術が進歩しても、それを実践し、田んぼを守り、次の世代へ米づくりを引き継ぐ人がいなければ、地域の農業は続いていかない。

自然を相手にする農業は、どれだけ技術が進歩しても、人間の思いどおりにはいかない。昭和５５年の冷害と、今の高温障害。時代が変わり、米づくりの技術が進んでも、自然に左右されることに変わりはない。あの日の冷害は、今を生きる私たちに、自然とともに生きることの意味を問い掛けている。

１１月の診療予定

Notice from mogami hospital

最上病院よりお知らせ

眼科は予約制です。
お手数ですが、事前のご予約をお願いいたします。

内科	外科	整形外科	眼科	婦人科
午前・午後 月・火・水・木・金 夜間診療（内科のみ） 毎週水曜午後６時から 11/6 循環器内科休診	午前 毎週　月曜日	午前 第２・４水曜日 毎週　金曜日 11/6、11/20 は 10 時診療開始	午前 毎週　火・木曜日 予約制	午前 毎週　金曜日

10/1 からインフルエンザ・新型コロナウィルスの予防接種を開始しております。問診票は受付に申し出て下さい。

● 受付時間のご案内

午前の部	午前	８：００～１１：３０（整形外科は午前１１時まで）
午後の部	午後	１：３０～　２：３０（木曜日の午後は休診）
夜間診療	午後	５：３０～　７：３０（夜間診療は水曜日のみ）

休日の医療費お支払いの受付について

・４月から病院での土・日・祝日の医療費のお支払いの受付は、土曜日のみ（午前８時 30 分から午後５時まで）となっております。
・日曜日及び祝日は、医療費のお支払いの受付は出来ませんのでご注意ください。
・急患受付には変更ありません。急患の方はこれまで通り、当院へお電話でご連絡いただき、来院してください。ご理解とご協力をお願いいたします。

問 ご予約・お問合せ　最上町立最上病院　☎　４３－２１１２

詳細は、最上町立最上病院のホームページでご覧ください。



少子高齢化の話

この町の医療を、みんなで育てる

最上病院　内科医長　森脇　義弘

最上病院 Dr.コラム（ドクター） Series 4

高齢化は、人類が目指してきた進歩の結果

今回はちょっと一息、少子高齢化の話。高齢化は、子供や若者が亡くならずに高齢まで生きるという、人類が目指してきた医学や医療、社会の目標、のはずでした。私の親世代では、兄弟はたくさんでしたが、子供の内に亡くなることが珍しくありませんでした。今や、子供のほとんどが普通に成人し、高齢まで生きます。

しかし、私達は、その先の問題に目を瞑り続けてきました。夢のような話だけして悪い話はしないインチキ商法と同じでした。

少子化も、同じ進歩の結果とも捉えられます。成獣に育つ前に死ぬことが多い動物は、多くの子供を作り、種の保存を図ります。子供を失わなくなった人類は、ベビーブームの時代にはさすがに人口増加から食料不足になることは心配しましたが、その後も、個の自由を種の保存より尊重する風潮や、子育てが困難となった時代背景もあり、少数精鋭の方策をとりました。少子化もある意味、進歩の結果ですが、行き過ぎたかもしれません。

町から医療を消さないために

病院でも少子高齢化が進んでいます。若手の充足不足と私を含めた在籍職員の高齢化です。原因は社会現象のそれと少し異なりますが、今のうちに手を打たないと町から医療が消えます。

医療職にこの町で働きたいと思ってもらうには、給与などの条件だけでなく、仕事そのものや地域、患者さんとの関わりに魅力を感じてもらうことが大切です。お金だけを求める医師もいますが、そんな医師は欲しくもありません。良い医療職が集まる決め手、医療や病院の存続の決め手は、病院と住民を含めた地域の魅力です。

若い人たちを、この町みんなで育てる

対策には、我々年寄りではなく、子供を含めた若い人の発想やチャレンジと、行政機関や市民団体など大人の応援が必要です。病院も彼らを応援したいと思っています。皆さんも、医学生などの実習生や研修生を見つけたら、旗を振って応援してください。

スポーツの世界でも、ベテランも必要ですが、若手がいないチームや育たないチームは強くなれません、魅力もなくなります。実際、病院でも、ベテランの知識や経験より若手の活動力や新鮮な発想の方が患者さんの役に立つことも多いです。慣れたベテラン医師より、慣れていない若手の方が一生懸命考えてくれます。

若い医療職に良い思い出を与え、心に残る患者になって彼らを育ててください。そして、いつかこの町に帰ってきてもらいましょう。

この町の将来の医療の鍵は、病院と皆さんとこの土地が握っています。お米もアスパラもおいしいものができています。一緒に何とかしましょう。